大橋Ｅ遺跡８

－大橋Ｅ遺跡第 13 次調査の報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1359 集

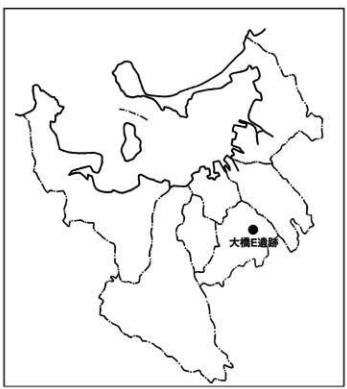
２０１９年

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1359 集

大橋E遺跡8

—大橋 E 遺跡第 13 次調査の報告—



遺跡略号　OOE－13
調査番号　1635

2019 年

福岡市教育委員会

序

福岡市は玄界灘を介して大陸・半島と一衣帯水の関係にあり、古代より双方の交流が絶え間なくおこなわれてきました。そのため市内には、数多くの歴史的な遺産が存在します。しかし、近年の著しい都市化により失われるこれらの文化財を後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は、共同住宅建築にともなう大橋E遺跡第13次発掘調査について報告するものです。今回の調査では弥生時代の溝や土坑をはじめ、中近世の遺構や遺物についても検出することができました。これらは大橋E遺跡における各時期の集落跡の形成や広がりを知る上での手がかりとなるとともに、地域の歴史の解明のためにも重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、株式会社グランディア様をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

平成31年3月25日

福岡市教育委員会
教育長　星 子 明 夫

例　言

1. 本書は株式会社グランディアが実施した南区三宅1丁目717番2,外16筆地内における共同住宅建設にともなう事前調査として、福岡市教育委員会が平成28年度に実施した大橋E遺跡第13次調査の調査報告書である。
2. 本書で用いる方位はすべて座標北である。
3. 検出した遺構については、調査時の検出順に通し番号を付した。本書ではこの番号に遺構の性格を示す用語を付して記述する。遺構の呼称は溝をSD、井戸をSE、土坑をSK、ピットをSP、不明遺構をSXと略号化している。
4. 本書で使用した遺構実測図は松﨑友理、瓜生建（福岡大学）が作成した。
5. 本書で使用した遺物実測図は松﨑、熊埜御堂和香子が作成した。
6. 製図は松﨑による。
7. 本書で使用した遺構および遺物写真は松﨑が撮影した。
8. 本書の執筆・編集は松﨑が行った。
9. 本書に関わる記録類・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・管理されるので活用されたい。

本文目次

Ⅰ．はじめに・・1
1．調査に至る経緯・・・1
2．調査組織・・・1
Ⅱ．遺跡の立地と歴史的環境・・2
Ⅲ．調査の記録・・6
1．調査の概要・・6
2．遺構と遺物・・6
(1) 溝・・6
(2) 井戸・・10
(3) 土坑・・17
(4) 不明遺構・・・20
(5) その他出土遺物・・・21
Ⅳ．おわりに・・22

挿図目次

Fig. 1　大橋Ｅ遺跡周辺遺跡分布図（1/50,000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
Fig. 2　大橋Ｅ遺跡調査地点位置図 (1/4,000)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
Fig. 3　第 13 次調査区位置図 (1/800)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
Fig. 4　第 13 次調査区遺構配置図（1/200）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
Fig. 5　第 13 次調査区南壁土層断面図（1/80）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
Fig. 6　各溝土層断面図（1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
Fig. 7　SD012・018・033 出土遺物実測図（1/3、12 ～ 14・21 ＝ 1/2、15 ＝ 1/1）・・・・・・・・9
Fig. 8　SE002 実測図 (1/40) および出土遺物実測図（1/3、25 ＝ 1/2）・・・・・・・・・・・・・10
Fig. 9　SE010 実測図 (1/40) および出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
Fig.10　SE063 実測図 (1/40)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
Fig.11　SE063 出土遺物実測図①（1/3、48 ＝ 1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
Fig.12　SE063 出土遺物実測図②（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
Fig.13　SK001 実測図（1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
Fig.14　SK001 出土遺物実測図（1/3、57=1/6）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
Fig.15　SK005 実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/3、61・62 ＝ 1/2）・・・・・・・・・・16
Fig.16　SK007 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3、64・65 ＝ 1/2）・・・・・・・・・・17
Fig.17　SK062 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
Fig.18　SX011 実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/3、84 ＝ 1/2）・・・・・・・・・・・・19
Fig.19　SP 出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
Fig.20　遺構外出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21

表目次

Tab.1　大橋Ｅ遺跡発掘調査一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

図版目次

PL. 1　(1) Ⅰ区全景（北から）　(2) Ⅱ区全景（北から）
PL. 2　(1) SE002 半裁（西から）(2) SE063 上面組石（東から）(3) SE063 井筒半裁（西から）
PL. 3　(1) SK001（東から）　(2) SK005（東から）　(3) SK062（南東から）
PL. 4　出土遺物

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、株式会社グランディアより申請された福岡市南区三宅1丁目717番2、外16筆における共同住宅建設にともなう埋蔵文化財の有無についての照会を平成28年9月30日付で受理した。申請面積は2598.04㎡、受付番号は28-2-546である。

申請地は大橋E遺跡の包蔵地中央部南側に位置していることから、埋蔵文化財課事前審査係は試掘調査を実施し、地表面下約100～140cmで遺構が検出された。この成果をもとに協議を行い、工事によってやむを得ず破壊される531.28㎡を対象に、記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。発掘調査は株式会社グランディアと福岡市との間で委託契約が締結され、平成29年1月5日に着手、平成29年3月3日に終了した。資料整理および報告書作成については平成30年度に行うこととなった。

2．調査組織

調査委託　株式会社グランディア

調査主体　福岡市教育委員会

（発掘調査：平成28年度　整理報告：平成30年度）

調査総括　文化財部埋蔵文化財課　課長　常松幹雄（28年度）

文化財活用部埋蔵文化財課　課長　大庭康時（30年度）

調査第1係長　吉武学

庶務　埋蔵文化財課　管理係長　大塚紀宜（28年度）

管理係　入江よう子（28年度）

文化財活用課　管理調整係　松原加奈江（30年度）

事前審査　埋蔵文化財課　事前審査係長　佐藤一郎（28年度）

本田浩二郎（30年度）

主任文化財主事　池田祐司（28年度）

田上勇一郎（30年度）

文化財主事　清金良太（28年度）

文化財主事　山本晃平（30年度）

発掘調査　埋蔵文化財課調査第1係　文化財主事　松崎友理

発掘作業　宮崎正　吉田哲夫　柴田秀人　河原明子　松下さゆり　浦崎てい子　木田憲作　久保和美　山本加奈子　渡辺清嗣　瓜生建（福岡大学）　吉岡田鶴子　木田ひろ子　西田文子　山本千加子

整理作業　大石加代子

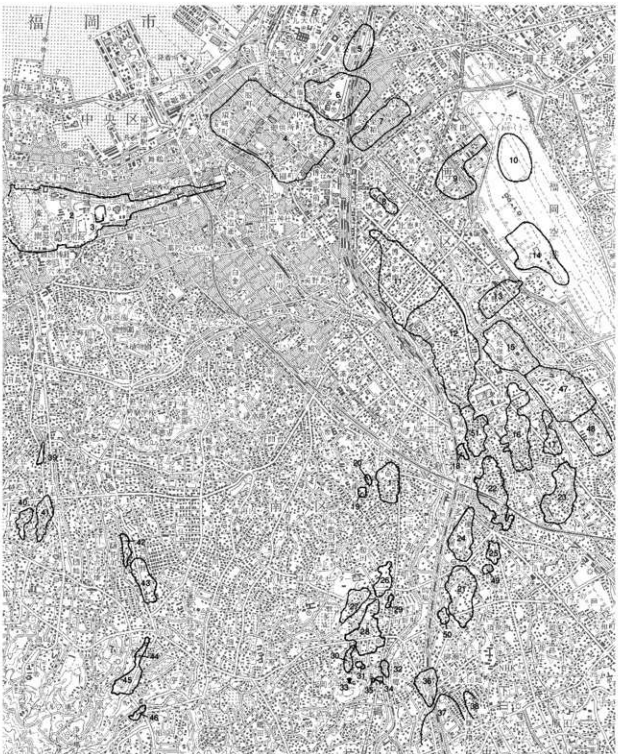
遺跡名	大橋E遺跡	調査次数	第13次	遺跡略号	OOE-13
調査番号	1635	分布地図図幅名	三宅　39	遺跡番号	2382
申請地面積	2598.04㎡	調査対象面積	531.28㎡	調査面積	487㎡
調査地	福岡市南区三宅1丁目717番2、外16筆			事前審査番号	28-2-546
調査期間	平成29（2017）年1月5日～3月3日				

Ⅱ．遺跡の立地と歴史的環境

大橋Ｅ遺跡は、南区大橋４丁目から三宅１丁目一帯に所在する遺跡で、福岡平野を貫入する那珂川の中流域右岸に分布する沖積微高地に位置する。この沖積地の西側には油山山塊から派生する標高約30 m程度の低丘陵が伸びており、丘陵部先端には江戸時代秋月藩士大蔵種周によって城絵図がつくられた古野城が立地していた。大橋Ｅ遺跡の周辺では、西側に150m離れた地点に三宅廃寺が位置している。1977年に最初の調査が行われ、現在までに瓦溜まりと布堀地業をともなう総柱建物跡、３間×４間の掘立柱建物跡、溝、土坑などが検出されている。老司Ⅰ式を主体とする瓦類や塼、輸入陶磁器、木簡、石帯巡方、ガラス製品などが出土した。これらの遺物から、７世紀から９世紀前半まで継続した寺院跡と考えられ、その規模は東西100～110 m程度と推定されている。また、三宅廃寺の関連遺跡として三宅瓦窯跡・岩野瓦窯跡が挙げられる。そのほかに大橋Ａ～Ｄ遺跡や三宅Ａ～Ｃ遺跡、和田Ａ・Ｂ遺跡が所在しているが、調査事例が少なく、遺跡の詳細は明らかになっていない。これらの遺跡は沖積微高地上に立地していることから、おそらく中世前半以降、沖積地の開発が開始される中で形成された集落遺跡と考えられる。

大橋Ｅ遺跡に関してはこれまで13次の調査が行われている。第１次調査では、弥生時代前期後半から古墳時代前期にかけての土坑群が検出された。包含層から弥生時代中期の土器や扁平片刃石斧、細型銅剣とみられる鋳型片が出土している。第２次調査では、弥生時代前・中期の土坑、中世の溝が検出された。また不定形の土坑にともなって朝鮮系無文土器が出土している。このほか遺構にはともなっていないが、越州窯系青磁椀や新羅系土器片、斜格子文を有する瓦片が出土している。第３次調査では、湾曲する中世前半の溝・土坑・ピットを検出している。遺物は須恵器や青磁椀、土師器坏などが少量出土した。第４次調査では弥生時代中期の溝１条が検出された。第５次調査（註１）では、旧河川、溝状・畝状遺構などを検出し、旧河川については縄文時代後期～晩期と推定された。溝状・畝状遺構については７世紀代と推定され、道路関連遺構の可能性が指摘された。第６次調査では、中世の井戸と柱穴群が検出された。遺物は中世の輸入貿易陶磁器や土師器などが出土しているが、いずれも小片である。第７次調査では中世後半から近世初頭にかけての溝および掘立柱建物跡、井戸が検出され、屋敷地と考えられる。第８次調査では古墳時代の溝１条と中世前半の柵列１条を検出した。遺物としては、縄文時代のサヌカイト製石匙が出土している。第９次調査では隣接する第７次調査で検出された屋敷地の続きが検出され、屋敷地の規模が東西22 m×南北11 mであることが想定された。第10次調査では古墳時代後期の柱穴や中世後期の溝、近世後期の溝や近世後期～近代の井戸などが検出された。中世後期の溝の中には直角に曲がり、断面がＶ字状を呈するものもあり、屋敷地の区画溝と推定されている。第11次調査では、土坑６基と溝状遺構１条が検出された。いずれの遺構も出土遺物は少ないが、細片の中には中世後半～近世初頭とみられる遺物が含まれていることから、第７・９次調査地で推定された屋敷地周辺の遺構として捉えられている。第12次調査では、溝１条と土坑、ピット群が検出された。溝は第３次調査地で検出された溝に続くものであり、方形区画をなす溝と推定されている。出土遺物は小片が多いため不明確であるが、第３次調査での出土遺物も踏まえ、古代～中世前期の段階で、方形区画を持った屋敷地が存在した可能性が指摘された。

註１：福岡市報告書第511集は第４次調査の報告として刊行されたが、調査次数が重複していたため、現在第５次調査の報告として訂正している。



1	大橋Ｅ遺跡	2	福岡城跡	3	鴻臚館跡	4	博多遺跡群	5	吉塚本町遺跡
6	堅粕遺跡	7	吉塚遺跡	8	駅東生産遺跡	9	榎田遺跡	10	上牟田遺跡
11	比恵遺跡群	12	那珂遺跡	13	東那珂遺跡	14	倉石遺跡	15	那珂君休遺跡
16	諸岡Ａ遺跡	17	諸岡Ｂ遺跡	18	井尻Ａ遺跡	19	三宅廃寺	20	三宅瓦窯
21	曰佐遺跡	22	井尻Ｂ遺跡	23	笹原遺跡	24	橋手遺跡	25	寺島遺跡
26	野多目Ａ遺跡	27	野多目Ｂ遺跡	28	野多目Ｃ遺跡	29	野多目Ｄ遺跡	30	卿内尺遺跡
31	老司Ａ遺跡	32	老司Ｂ遺跡	33	老司古墳	34	老司窯跡	35	老松神社古墳群
36	警弥郷Ａ遺跡	37	警弥郷Ｂ遺跡	38	弥永遺跡	39	神松寺遺跡	40	片江Ａ遺跡
41	片江Ｂ遺跡	42	樋井川Ａ遺跡	43	樋井川Ｂ遺跡	44	松原古墳	45	松原遺跡
46	松原Ｋ遺跡	47	板付遺跡	48	高畑遺跡	49	笠抜遺跡	50	上曰佐遺跡
51	五十川遺跡								

Fig.1　大橋Ｅ遺跡周辺遺跡分布図（1/50,000）

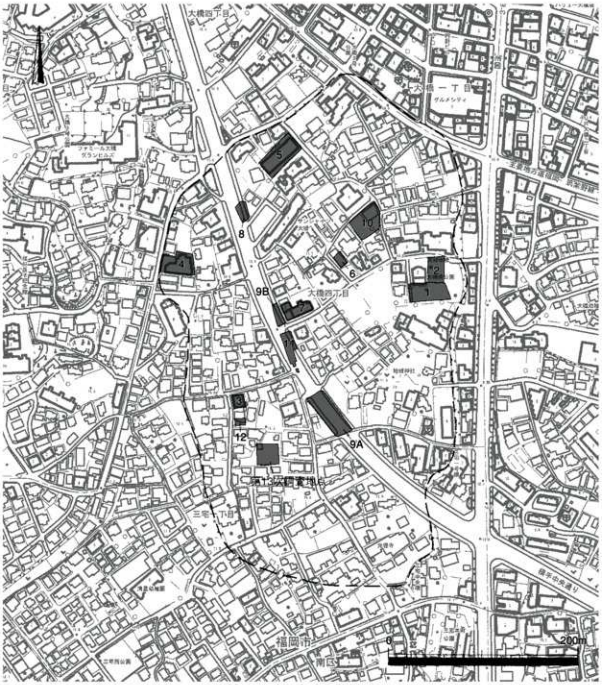


Fig.2　大橋 E 遺跡調査地点位置図 (1/4,000)

Tab.1　大橋 E 遺跡発掘調査一覧表

次数	報告書	調査番号	所在地	調査面積 (㎡)	主な時期	主な遺構	出土遺物
1	219	8641	大橋 4 丁目 649-1 外	55	弥生前期～古墳前期	土坑	扁平片刃石斧・縄紋系土器
2	219	8830	大橋 4 丁目 647-5・6	567	弥生前期～中期、中世	土坑、溝	朝鮮系無文土器
3	279	9032	三宅 1 丁目 1108-2	80	古代～中世	土坑、溝	
4	未報告	9148	大橋 4 丁目 1122-4	70	弥生中期、近代	溝状遺構、湿地状土坑	
5	511	9547	大橋 4 丁目 629-8 外	580	縄文後期～晩期、古墳終末	旧河川、溝状・鉄状遺構	
6	未報告	9852	大橋 4 丁目 670-8	48	中世	井戸、柱穴群	
7	740	0111	大橋 4 丁目 16-18	425.3	中世前半、中世後半～近世初頭	溝、井戸、土坑、掘立柱建物跡	
8	791	0131	大橋 4 丁目 14-30	151.9	古墳、中世前半	溝、柵列	サヌカイト製石鏃
9	791	0203	大橋 4 丁目 6 他	830	中世～近世初頭	溝、掘立柱建物跡、土坑、柵列	
10	1015	0366	大橋 4 丁目 11-22	233	中世～近世後半	溝、井戸、土坑	
11	1071	0752	大橋 4 丁目地内	380	中世後半～近世初頭	土坑、溝	
12	年報 VOL.29	1423	三宅 1 丁目 1101-3 の一部	63	古代～中世前期	溝、土坑	
13	本報告	1635	三宅 1 丁目 717 番 2 外 16 筆	487	弥生前期末～中期初頭、古代、中世、近世	溝、井戸、土坑	扁平片刃石斧

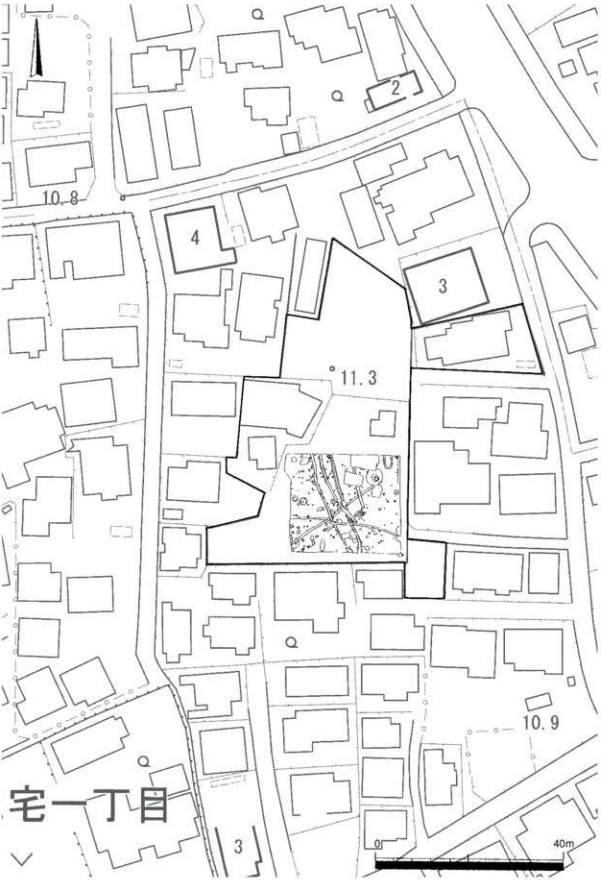


Fig.3　第 13 次調査区位置図 (1/800)　太線は申請地の範囲

Ⅲ．調査の記録

1．調査の概要

本調査地は大橋Ｅ遺跡の中央部南側に位置している。調査前の現況は宅地解体後の平坦な土地であり、標高は 11.2 ～ 11.6m を測る。遺構検出面の標高は約 10.4 m を測り、調査区内は北西に向かって緩やかに傾斜する。遺構面までの基本層序は上から表土・褐色粘質土・明褐色粘質土・地山である。調査区内における地山は基本的に黄色シルトであるが、調査区西側と北東側では褐色砂質土であった。

発掘調査は平成 29 年 1 月 5 日に着手した。排土を場内で処理する必要があったため、まず調査地の南側をⅠ区として最初に調査を行い、Ⅰ区の調査終了後に反転して北側の調査を行うこととした。機材等の搬入後、6 日から重機による表土剥ぎを行い、地表面から約 80 ～ 100cm で遺構面に達した。Ⅰ区の遺構検出面の標高は約 10.4 ～ 10.7m を測る。その後、世界測地系によるトラバース杭の設定や壁面清掃などを行い、遺構の検出作業を開始した。検出遺構の掘り下げや写真撮影、1/20 縮尺を主体とする図化、遺物の取り上げ、周辺測量などの作業を進め、遺構の掘削作業がほぼ終了した 2 月 2 日にⅠ区の全景写真を撮影した。その後、2 月 6・7 日に重機によるⅠ区の埋め戻しと、Ⅱ区の表土剥ぎを行った。Ⅱ区の遺構検出面の標高は約 10.4 ～ 10.6 m を測る。Ⅰ区と同様の作業手順で調査を行い、2 月 27 日にⅡ区の全景写真を撮影した。その後、図化作業や遺構の写真撮影、出土遺物の洗浄作業などを行い、3 月 1 ～ 3 日に重機によって埋め戻し、調査を終了した。調査の対象面積は申請面積 2598.04 ㎡のうち 531.28 ㎡であるが、調査区周辺の安全対策上、実際の調査面積は 487 ㎡であった。

検出された遺構は溝 5 条、井戸 4 基、土坑 4 基、ピットである。遺物はパンケース約 16 箱分が出土した。溝に関しては 4 条が南北方向、もう 1 条が東西方向に位置する。溝同士の切り合いから東西方向の溝が最も古く、弥生時代前期末～中期初頭以前の時期と推定される。井戸に関しては 4 基のうち 1 基は近世末～近代とみられる瓦井戸であった。調査区北東で検出された井戸は直径約 3.5 m を測り、井筒に結桶を用いていた。井筒の上部では石や瓦が環状に並んだ状態で検出され、井筒上部を固定するためと考えられる。出土した遺物などから 13 世紀中頃～ 14 世紀初頭頃の井戸と推定される。土坑は 4 基検出され、そのうち調査区南西側に位置する土坑では弥生時代中期初頭の土器片がまとまって検出された。また、調査区北東端では隅丸長方形を呈する土坑が 1 基検出され、古代末～中世前半の時期と推定される。

なお、調査時の遺構番号については 001 から 3 桁の通し番号を遺構の種別に関わらず付している。それらの番号には欠番はあるが、重複しているものはない。次項の報告に関しても調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号と組み合わせて記述することとする。

2．遺構と遺物

（1）溝（SD）

5 条検出し、4 条が南北方向、もう 1 条が東西方向に延びる。

SD012（Fig.6・7）

調査区のほぼ中央に位置し、ややカーブしながら調査区を南北方向に縦断する。調査区内では 21.4m にわたって検出され、さらに調査区外へと延びている。SD022 を切り、SD018 に切られる。溝の幅は 60 ～ 100cm、深さは約 25cm を測り、断面は台形状を呈する。溝の上層には褐色の砂質土、下層には黒褐色の粘質土が堆積していた。遺物は弥生土器片を中心にパンケース約 2 箱分が出土し、土器の多くが上層で検出された。出土した土器の時期は弥生時代前期末～中期初頭である。

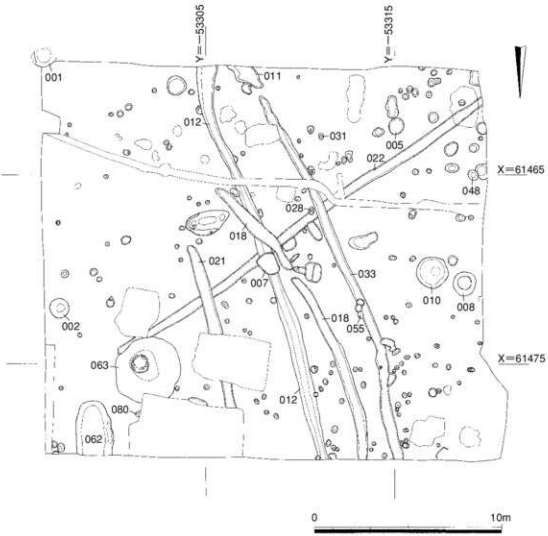


Fig.4　第 13 次調査区遺構配置図（1/200）

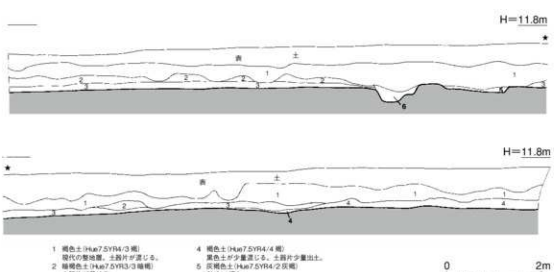


Fig.5　第 13 次調査区南壁土層断面図（1/80）

出土遺物（Fig.7、PL.4）

1 ～ 9 は弥生土器である。1 ～ 3 は甕の口縁部で、2･3 は口縁部に刻目を有する。1 は胎土に細かな白色砂粒を多量に含む。器面にはナデ調整がみられる。2 は刻目突帯を有し、口縁端部にヨコナデ、胴部上半でタテハケメ調整が施される。外面には煤が付着する。3 は胴部上半でタテハケメの上にナナメハケ調整がみられる。4 は刻目突帯付近でヨコナデ、それ以外の外面でタテナデが施される。5 ～ 8 は甕の底部で、5･6 は上げ底、7･8 は平底を呈する。5 は外面でハケメ、内面でナデ調整がみられる。焼成は良好で、色調は赤茶褐色を呈する。6 は底径 7.9cm を測る。底部から胴部にかけての形状がやや歪である。器面の調整は外面でヘラナデ調整、内面でナデ調整がみられる。7 は底部がややくびれ、胴部に向かって外反する。8 は胴部に向かって若干開くがほぼ直線的である。9 はミニチュア土器で、底部径 4.3cm、残存高 5.2cm を測る。底部は上げ底で胴部が丸味を帯びる。外面でユビナデ、内面でナデ痕跡がみられる。10 は土製の投弾である。全長 3.8cm、最大径 2.3cm を測る。色調は淡赤褐色を呈する。11 は玄武岩製の石斧とみられるが、欠損しており刃部は確認できない。残存長 10.7cm、最大幅 7.2cm、厚さ約 5.2cm を測る。表面では一部細かな研磨痕がみられるが、全体的に敲打痕があり、粗い研磨にとどまっている。12 ～ 14 は黒曜石の剥片である。12・13 では微細な調整痕が認められ、14 の上端では加工痕がみられる。15 はコバルトブルー色のガラス小玉で、直径 0.4cm、孔径 0.1cm、厚さ 0.15cm を測る。混ざり込みの可能性が考えられる。

SD018（Fig.6・7）

調査区のほぼ中央に位置する。南北方向に約 16m 検出され、カーブしながら北側の調査区外へと続く。南側では一部途切れ、不連続の状態である。SD012 と SD022 を切る。溝の幅は 40 ～ 70cm、深さは約 26cm を測り、壁面はほぼ直線的に立ち上がる。埋土は褐色土で、弥生土器や土師器の破片などが少量出土した。出土遺物の年代から古墳時代初頭の時期と推定される。

出土遺物（Fig.7）

16 は土師器で、精製の小型丸底壺の口縁部とみられる。器面の色調は淡黄褐色を呈する。17 は土製の投弾である。全長 4.4cm、最大径 2.7cm を測り、色調は淡赤褐色を呈する。

SD021（Fig.6）

調査区の中央よりやや東側に位置し、南北方向に約 8.8 m 検出された。SD022 を切り、北側は撹乱で削平される。幅 40 ～ 70cm、深さ約 6cm を測り、壁面は緩やかに立ち上がる。埋土は地山のブロック土を少量含んだ灰茶褐色土である。弥生土器の小片が数点出土したが、時期は不明確である。

SD022

調査区の南西隅から北東側に向かって約 23.6 m 検出され、本調査区の溝の中で唯一東西方向に横断する。南西側は調査区外へと続き、北東端は SE063 に切られる。幅は約 30 ～ 50cm、深さは南西側で約 25cm、北東側で約 5cm を測る。埋土の主体は黒褐色土である。遺物が小片のため時期は不明確であるが、切り合いから検出された溝の中で最も古く、弥生時代前期末～中期初頭以前と考えられる。

Fig.6　各溝土層断面図（1/40）

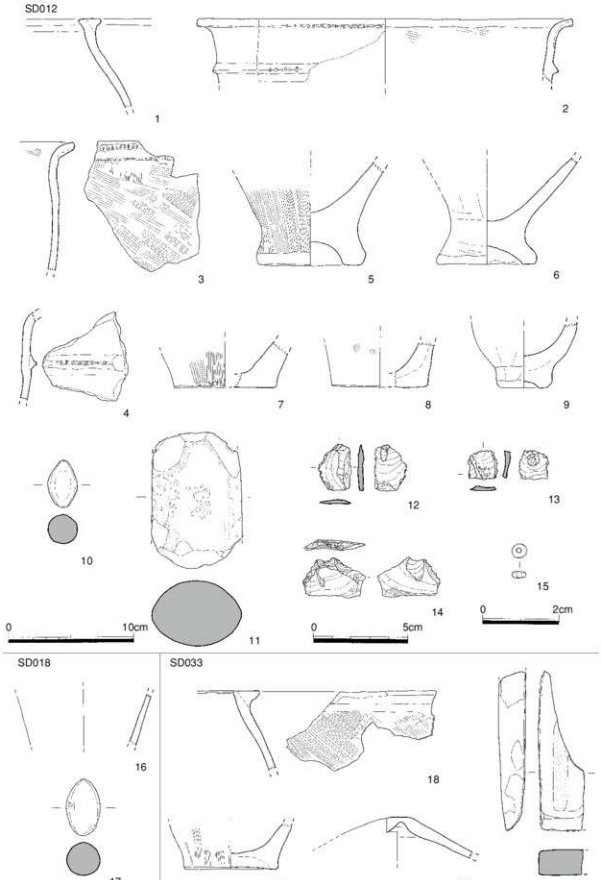


Fig.7　SD012・018・033 出土遺物実測図（1/3、12～14・21＝1/2、15＝1/1）

SD033（Fig.6・7）

調査区の中央よりやや西側に位置し、南北方向に約 20.6 m 検出された。SD022 を切り、北側は調査区外に続く。幅 30 ～ 60cm、深さ約 12cm を測り、断面は台形状を呈する。埋土は暗褐色土で、弥生土器片を中心にパンケース 1/3 箱ほどの遺物が出土した。なお、SD033 の南側では弥生土器がまとまって出土した SX011 が検出されており、不連続ではあるが同じ溝の可能性もある。しかし、溝の幅や埋土の違いから別遺構として報告する。

出土遺物（Fig.7、PL.4）

18 ～ 20 は弥生土器である。18・19 は甕で、18 では口縁部外面にヨコナデ、胴部にナナメハケ調整がみられる。19 は復元底径約 7.2cm を測る。胎土には白色砂粒を多く含み、器面の色調は内面が暗橙色、外面が淡橙色を呈する。20 は蓋である。胎土は緻密で、白色粒や石英を少量含む。器面は淡赤褐色を呈する。21 は粘板岩製の扁平片刃石斧である。残存長 8.4cm、残存幅 2.4cm、厚さ 1.35cm を測る。

（2）井戸（SE）

4 基検出した。その内 SE008 は瓦井戸で、上面は真砂で埋められていた。井筒には結桶が用いられていたが、さらにその外側にコンクリートの枠が円形に巡っていた。底面で現代のゴミも確認されたことから、近世末～近代につくられた井戸が現代まで使用されていたと考えられる。

SE002（Fig.8、PL.2-（1））

調査区の北東側で検出された。平面は直径約 1.0m の円形を呈し、深さは約 1.3m を測る。湧水は認められなかった。土師器や須恵器の破片を中心にパン

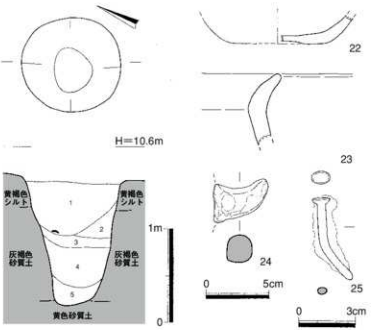


Fig.8　SE002 実測図 (1/40) および出土遺物実測図（1/3、25 ＝ 1/2）

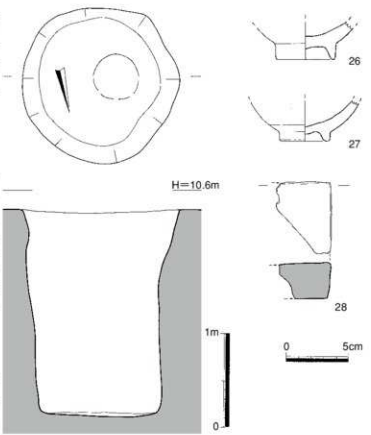


Fig.9　SE010 実測図 (1/40) および出土遺物実測図（1/3）

ケース 1/2 箱の遺物が出土した。出土遺物の年代から古代の井戸と考えられる。

出土遺物（Fig.8）

22 は黒色土器の底部片で、高台は欠損している。23・24 は土師器である。23 は甕で、口縁は肥厚する。胴部は直線的とみられ、内面にヘラケズリの痕跡が認められる。8 世紀代とみられ、混ざり込みであろう。24 は把手で、器面は淡橙色を呈する。25 は鉄製釘で、全長 4.35cm を測る。

SE010（Fig.9）

調査区の西側で検出された。平面は直径約 1.6m の円形を呈する。深さは約 2.1m を測り、底部付近で湧水した。井筒の痕跡は掘方中央よりやや西側でわずかに認められた。輸入陶磁器や土師器の破片などパンケース 1/5 箱ほどの遺物が出土した。出土遺物の年代から 12 世紀中頃～後半頃の井戸と考えられる。

出土遺物（Fig.9）

26・27 は白磁椀である。26 の高台は細く高く直立する。胎土は灰白色を呈し、釉色は水色に近い。高台内面は露胎である。27 は見込み内面の釉を環状に掻き取る。つくりは粗雑で胎土は淡橙色、釉色は灰緑色を呈する。28 は壜で、胎土に白色粒や金雲母、スサを含む。胎土は淡灰褐色、外面は暗灰褐色を呈する。26 ～ 28 以外では、盤の小片も出土しており、内面では白地の上に褐釉と緑釉が施されている。

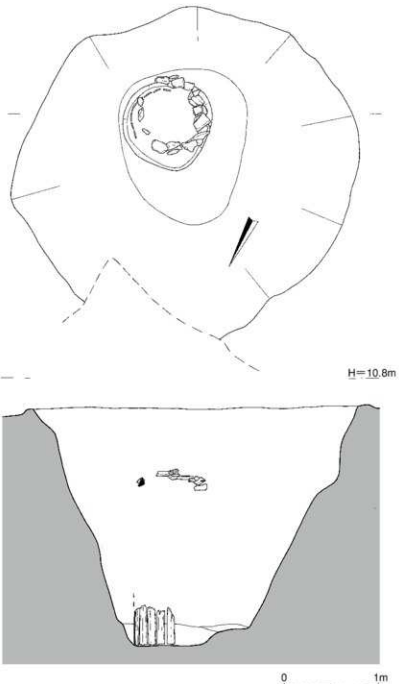


Fig.10　SE063 実測図 (1/40)

SE063（Fig.10～12、PL.2-（2）・（3））

調査区北東側で検出された。南東側では SD022 を切り、北側は攪乱によって削平される。平面は長軸約 3.7m、短軸約 3.5m の楕円形を呈する。深さは約 2.5m を測り、底部付近で湧水した。掘方中央よ

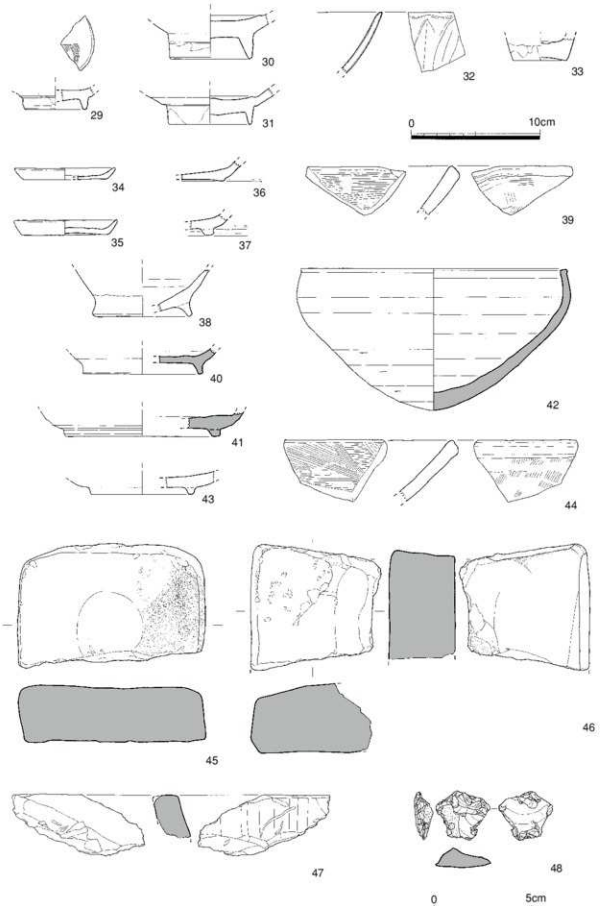


Fig.11　SE063 出土遺物実測図①（1/3、48 ＝ 1/2）

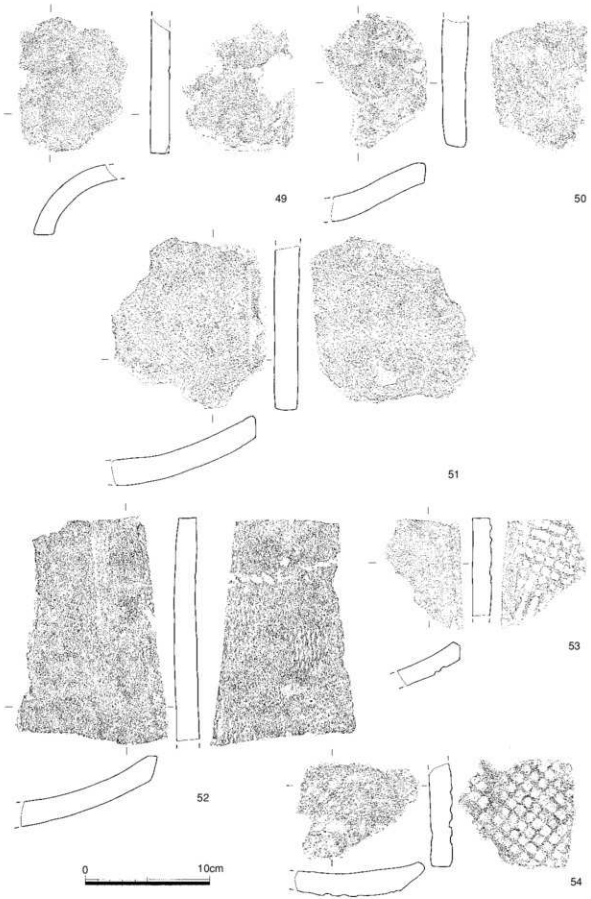


Fig.12　SE063 出土遺物実測図②（1/3）

りやや南東側では井筒が検出され、井筒上面までの深さは約 2.1m を測る。井筒には幅約 8cm の板材を組み合わせた結桶が用いられ、板材が 8 枚残存していた。また、井筒の検出面より約 1.2m 上層では、石や瓦が環状に巡る状況が確認された。少なくとも 2 段以上組まれていたとみられ、井筒からやや西側にずれるが、井筒上部の固定のためと考えられる。輸入陶磁器や土師器、瓦などパンケース 4 箱分の遺物が出土した。出土遺物の年代から 13 世紀中頃～ 14 世紀初頭頃の井戸と考えられる。

出土遺物（Fig.11・12、PL.4）

29 ～ 31 は白磁椀である。29 は復元底径 4.8cm を測り、見込み内面に櫛目文が施される。胎土はやや粗雑で淡橙色を呈し、釉は黄色を帯びた白色を呈する。体部外面下半以下底部まで露胎とみられる。30 は底径 6.4cm を測り、高台は高く直立する。胎土はやや粗雑で、淡橙色を呈する。釉は黄色を帯びた白色を呈し、釉表面には気泡がある。高台外面に釉垂れはあるが、底部は露胎である。31 は復元底径 6.4cm を測り、見込み内面に沈線状の段を有する。胎土は灰色を帯びた白色で、釉は黄色を帯びた白色を呈する。30 と同様に釉垂れはあるが、底部は露胎である。32 は龍泉窯系青磁椀で、外面に鎬連弁文が施される。胎土は緻密で灰色を呈し、釉色は緑色である。33 は青磁壺の底部で、底径 4.2cm を測る。胎土は緻密で灰色を呈し、器面の色調は茶褐色である。緑色の釉が体部にわずかに認められるが、底部は露胎を呈する。34・35 は土師器の小皿である。34 は復元口径 7.8cm、器高 1.0cm を測る。胎土には白色砂粒や金雲母を含む。底部外面には回転糸切りの痕跡がみられる。35 は口径 7.9cm、器高 1.1cm を測る。胎土には白色砂粒や金雲母を含む。底部外面には回転糸切りと板状圧痕が認められる。36 は土師器の坏で、胎土に石英小粒や金雲母を少量含む。底部外面に回転糸切りの痕跡が認められる。37 は高台付坏である。胎土に白色砂粒や金雲母を少量含む。38 は土師器の坏である。底部外面では高台の継ぎ目痕跡が残る。胎土には白色砂粒や金雲母を少量含む。高台内面ではヨコナデ、それ以外では回転ヨコナデの痕跡がみられる。39 は土師器の片口鉢である。胎土には白色砂粒を少量含む。内面でハケメ、外面ではハケメ調整の上にナデ調整が認められる。40・41 は須恵器の高台付坏である。40 は復元底径 9.2cm を測る。胎土には白色砂粒を含み、器面は灰褐色を呈する。41 は復元底径 12cm を測る。胎土は緻密で、白色砂粒を少量含む。器面は灰白色を呈する。42 は須恵器の鉢で、底部は尖底を呈する。復元口径 20.4cm、器高は 10.9cm を測る。胎土は緻密で、体部外面下半に回転ヘラケズリ、底部内面にナデ、それ以外に回転ナデ調整の痕跡がみられる。44 は瓦質の捏鉢である。胎土に白色砂粒と金雲母を含み、器面は灰褐色を呈する。体部外面ではナナメハケ調整の上にナデ、それ以外でハケメ調整が認められる。

45・46 は砥石である。ともに井筒上面の組石の中から出土し、砥石を井筒上部の固定に転用したと考えられる。45 は砂岩製で、残存長 9.0cm、最大幅 14.4cm、厚さ 4.4cm を測る。裏面は自然面で、それ以外の面で研磨痕跡が認められる。表面と側面では一部黒色化しており、被熱痕跡とみられる。46 は砂岩製で残存長 9.7cm、最大幅 9.9cm、厚さ 5.3cm を測る。上側面は自然面であるが、それ以外で研磨痕跡がみられる。表面と側面は被熱によって一部赤色化している。47 は滑石製石鍋で、外面に平ノミによる調整が認められる。48 は黒曜石製のスクレイパーである。長さ 2.4cm、幅 2.8cm、厚さ 1.0cm を測る。井筒内から出土し、混

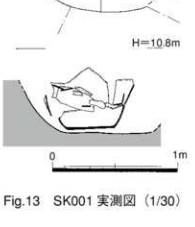


Fig.13　SK001 実測図（1/30）

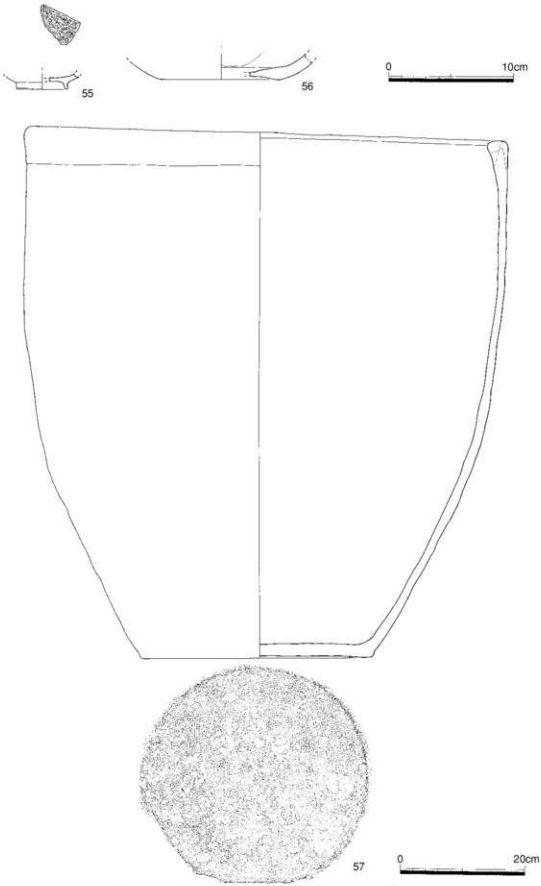


Fig.14　SK001 出土遺物実測図（1/3、57=1/6）

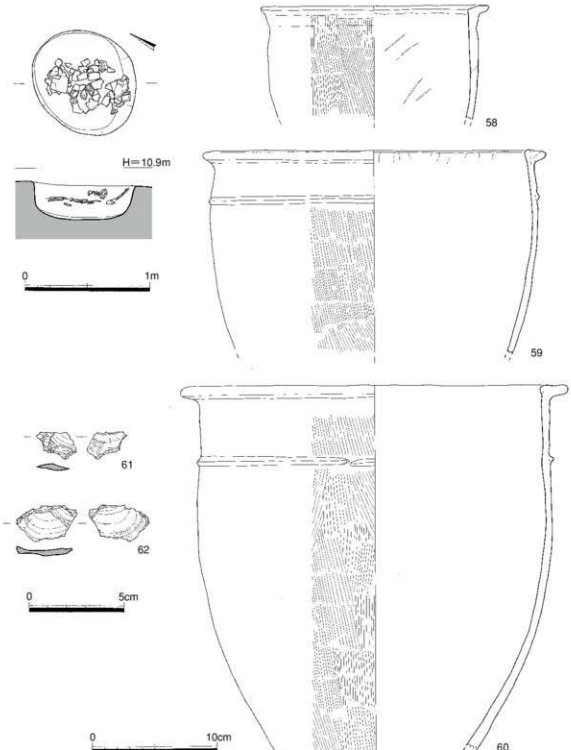


Fig.15　SK005 実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/3、61・62 ＝ 1/2）

ざり込みとみられる。49 ～ 54 は瓦である。52・54 は井筒上面の組石で出土した。49 は丸瓦で、凹面に布目痕、凸面にナデ調整と沈線が認められる。凸面は赤褐色を呈する。50 ～ 54 は平瓦である。50 ～ 53 の凹面では布目痕がみられ、52 の凸面には縄目タタキの上にナデ調整、53・54 の凸面には格子目タタキが認められる。器面の色調は 50 ～ 53 が灰褐色、54 が灰白色を呈する。53・54 の胎土は緻密であるが、50 ～ 52 は白色砂粒を多く含み、やや粗雑である。

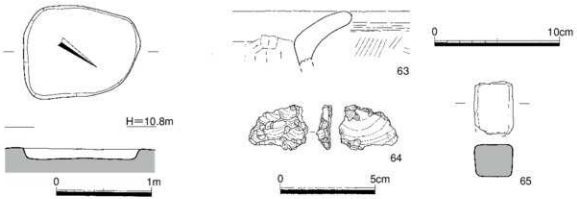


Fig.16　SK007 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3、64・65＝1/2）

（3）土坑（SK）

SK001（Fig.13・14、PL.3–(1)）

調査区南東隅で検出された。掘方は調査区外へ続くため、規模は不明であるが、平面は円形と推定される。深さは約 51cm を測り、中に大甕が埋められていた。埋土は炭化物を少量含んだ暗褐色粘質土である。甕の中には石が落ち、甕の上半は割れて中に落ち込んだ状態であった。出土した遺物の年代から近世の土坑と推定される。

出土遺物（Fig. 14）

55 は陶器の小椀である。胎土は緻密で淡茶褐色を呈する。畳付を除き、褐釉が施されており、内面では褐釉の上に白泥がかけられ、筆ナデが施されている。56 は褐釉陶器の底部である。胎土は緻密で灰色を呈し、器面の色調は赤茶褐色である。外面は露胎で、底部内面に褐釉が施される。57 は大甕である。口径 76.8cm、底径 36.5cm、器高 83.0 ～ 85.0cm を測る。器面には板状工具によるナデ調整が施され、器壁にはやや凹凸がある。底部外面にはハケメ調整が認められる。胎土は緻密で白色砂粒を少量含む。胎土は淡黄橙色、器面は暗灰褐色を呈する。

SK005（Fig.15、PL.3–(2)）

調査区南西側で検出された。長軸約 0.9m、短軸約 0.8m を測り、平面は楕円形を呈する。深さは約 30cm を測り、底面は浅い凹レンズ状を呈する。壁面は緩やかに立ち上がり、断面は逆台形をなす。上層に暗褐色砂質土、下層に黒褐色砂質土が堆積しており、上層で弥生土器片がまとまって出土した。出土土器の年代から弥生時代中期初頭の土坑と推定される。

出土遺物（Fig. 15、PL.4）

58 ～ 60 は甕で、いずれも底部は欠損する。58 は口径 17.9cm を測る。器面は茶褐色を呈し、外面には黒斑がある。胴部外面にタテハケメ、口縁部にヨコナデ、内面にナデとヘラの調整痕が認められる。59 は口径 27.0cm を測る。器面は赤茶褐色を呈し、外面に煤が付着する。胴部外面にタテハケメ、口縁部にヨコナデ、口縁部内面にユビオサエ、内面にナデ調整がみられる。60 は口径 30.4cm を測る。胎土に白色砂粒を多量に含み、器面は茶褐色を呈する。胴部外面にタテハケメ、内面にナデ、突帯付近ではヨコナデ調整がみられ、突帯の継目のずれも確認できる。61・62 は黒曜石の剥片である。

SK007（Fig.16）

調査区中央で検出され、SD012 と SD022 を切る。長軸約 1.2m、短軸約 1.0m を測り、平面は歪な楕円形を呈する。深さは約 10cm と浅く、埋土は暗褐色砂質土である。出土遺物の年代から古代の土坑と推定される。

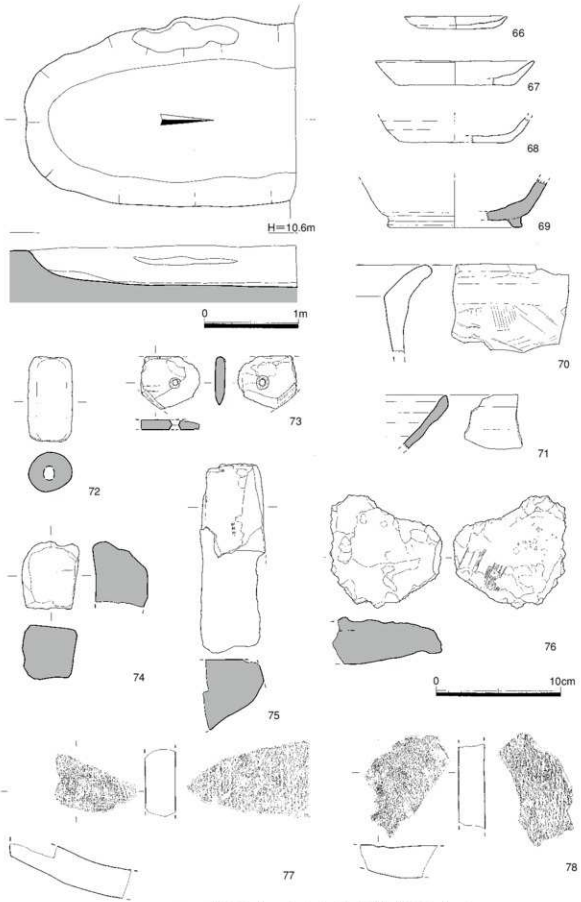


Fig.17　SK062 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（Fig. 16、PL.4）

63 は土師器の甕である。口縁部は厚く、大きく外反する。口縁部外面でハケメ、口縁端部～口縁内面でヨコナデ、頸部内面でケズリ調整がみられる。64 は黒曜石の石核で、混ざり込みであろう。65 は頁岩製の手持ち砥石である。残存長 2.8cm、最大幅 2.0cm、厚さ 1.7cm を測る。欠損部を除き、全面で細かな研磨痕跡が認められる。

SK062（Fig.17、PL.3－(3)）

調査区北東端で検出された。北側が調査区外へと続くため、全体の規模は不明であるが、長軸 2.8m 以上、短軸約 2.0m を測り、平面は隅丸長方形を呈すると推定される。深さは約 40cm で、壁面は緩やかに立ち上がる。西側では一部平坦面が検出された。出土遺物の年代から古代末～中世初頭と推定される。

出土遺物（Fig. 17、PL.4）

66 ～ 68・70 は土師器である。66は小皿で、口径 8.1cm、器高 1.0cm、底径 5.8cm を測り、底部には回転ヘラ切りと板状圧痕がみられる。67 は坏で復元口径 12.5cm、器高 1.9cm、復元底径 9.1cm を測り、底部には板状圧痕がわずかに認められる。68 は坏で復元底径 8.6cm を測る。底部には回転ヘラ切りがみられる。70 は甕で、外面にはハケメの上にナデ調整がみられる。外面は暗灰褐色、内面は淡赤褐色を呈する。69 は須恵器の高台付坏で高台の復元径は約 10.7cm を測る。胎土に石英などを少量含み、器面は灰白色を呈する。71 は東播系須恵器の鉢である。内外面ともにヨコナデの痕跡がみられる。

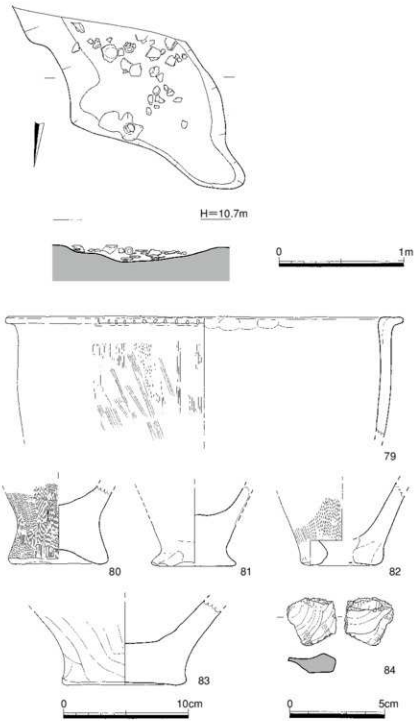


Fig.18　SX011 実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/3、84 ＝ 1/2）

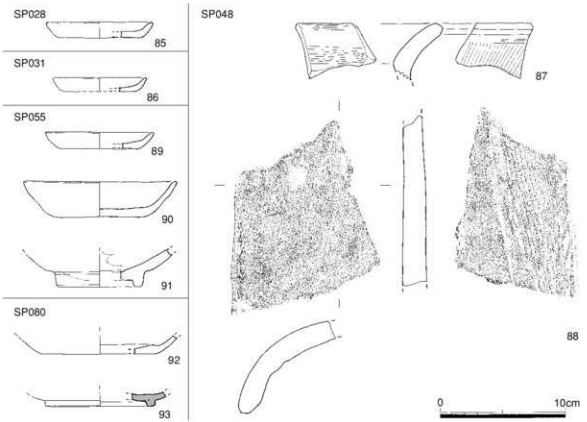


Fig.19　SP 出土遺物実測図（1/3）

72 は土錘である。完形品で長さ 6.7cm、直径 3.5cm を測る。73 は片岩製の石庖丁である。刃部と背には細かな研磨痕が認められる。74･75 は砥石である。74 は細粒砂岩製で、表面にはやや粗い研磨痕跡がみられるが、それ以外は自然面である。75 は粘板岩製で欠損が大きく、表面上部と側面にのみ研磨痕がみられる。76 は椀形滓である。重量は 370.5g を測る。上面は一部流動化しており、下面には一部木質が付着している。77･78 は平瓦である。ともに凸面に縄目タタキ痕、凹面に布目痕跡が認められる。器面の色調は 77 が赤茶褐色、78 が淡灰白～淡灰黄色を呈する。

（4）不明遺構（SX）

SX011（Fig.18）

調査区南端中央で検出され、北側には SD033 が位置する。本調査地では遺構の幅や埋土の違いから SD033 と別遺構にしたが、周辺の調査事例の増加によっては不連続ではあるものの同一の溝となる可能性がある。SX011 の南側は調査区外へ続くため、全体の規模は不明であるが、長軸 1.5m 以上、短軸約 1.2m を測る。深さは約 10cm で、底面には凹凸がある。埋土は灰褐色砂質土を主体とし、検出上面で弥生土器がまとまって出土した。出土土器の年代から弥生時代前期末～中期初頭と推定される。

出土遺物（Fig.18）

79 ～ 83 は弥生土器である。79 は甕で、口縁部には刻目が施される。復元口径約 31.4cm を測り、胎土には白色砂粒を多く含む。器面は内面が赤茶褐色、外面が暗茶褐色を呈し、外面には一部煤が付着する。80 ～ 83 は甕の底部である。80 は上げ底を呈し、外面には細かなハケメ調整がみられる。81 は平底で、底部のくびれは明瞭である。外面にはヘラ調整が認められる。82 はやや上げ底を呈し、底部に穿孔があった可能性がある。外面にはハケメ調整が施される。83 はやや上げ底で、器壁が厚い。外面にヘラナデ調整がみられる。84 は黒曜石の石核で、長さ 2.5cm、幅 2.5cm、厚さ 1.0cm を測る。

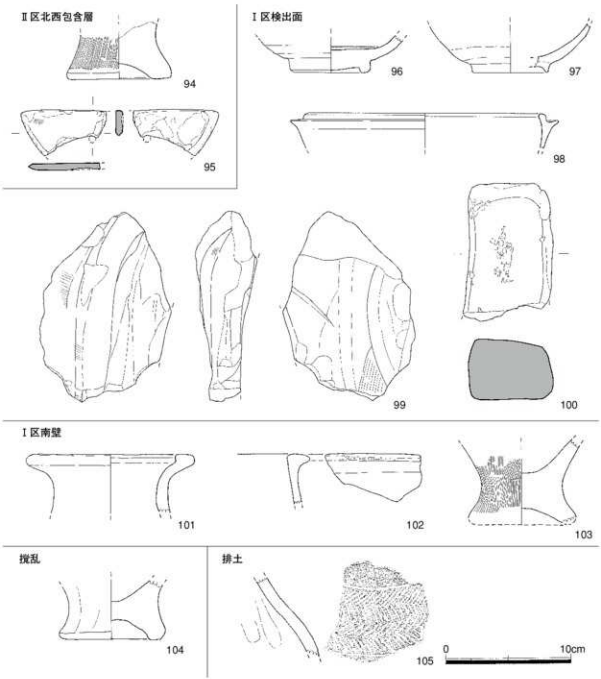


Fig.20　遺構外出土遺物実測図（1/3）

（5）その他出土遺物（Fig. 19・20、PL.4）

85・86 は土師器の小皿である。85 は SP028 で出土し、復元口径 8.3cm、器高 1.2cm を測る。86 は SP031 で出土した。復元口径 7.3cm、器高 1.1cm を測る。87・88 は SP048 で出土した。87 は甕の口縁部で、外面にはナナメハケメ、口縁端部にはヨコナデ、内面にはナデ調整がみられる。胎土には白色砂粒を多く含む。88 は丸瓦である。凹面には布目痕がみられ、側面にはヘラ調整が施される。胎土には白色粒を多く含み、器面は淡橙色～黒褐色を呈する。89 ～ 91 は SP055 で出土した。89 は土師器の小皿で、口径 8.6cm、器高 1.3cm を測り、胎土には金雲母を多く含む。底部外面には回転糸切りがみられる。90 は土師器の坏である。口径 12.0cm、器高 2.8cm を測り、底部外面に回転糸切りの痕跡が

みられる。91 は白磁椀である。底部内面に沈線状の段を有し、体部内面にはヘラによる草花文様が施される。胎土は灰白色、釉色は灰色を帯びた白色で、気泡や貫入がみられる。92･93 は SP080 で出土した。92 は土師器の坏である。復元底径 9.0cm を測り、胎土には白色砂粒や赤色粒を少量含む。93 は須恵器の高台付坏である。器面は暗灰褐色で、内外面ともに回転ヨコナデが施される。

94･95 は調査区北西側の包含層で出土した。94 は甕の底部とみられ、上げ底を呈する。外面には細かなタテハケメ調整がみられる。95 は頁岩質砂岩製の石鹿丁で、半月形を呈する。96 ～ 100 は調査区南側の遺構検出時に出土した。96 は白磁椀である。底部内面には明瞭ではないが、沈線状の段を有する。胎土はやや茶色がかった白色、釉色は灰白色を呈する。釉は高台から底部まで垂れる。97 は土師器の高台付坏である。胎土には白色砂粒や石英を含み、器面の色調は内面が茶褐色、外面が暗灰褐色を呈する。98 は土師器の坏で、復元口径 18.2cm を測る。器面にはヨコナデ調整が施される。99 は移動式竈で、庇と焚口が一部残存している。胎土には白色砂粒や石英、雲母を含む。器面は淡茶褐色を呈し、焚口の内面は被熱により赤茶褐色を呈する。100 は砂岩製の砥石である。下面は自然面で、一部研磨痕がみられる。上面には敲打痕もみられ、敲石として再利用された可能性がある。101 ～ 103 は調査区南壁の清掃時に出土した。101 は壺の口縁部で、丹塗りの痕跡が認められる。復元口径は 13.2cm を測る。102・103 は甕である。102 の口縁部には刻目が施される。103 は上げ底を呈する。外面にはタテハケメがみられ、一部ナデ消されている。104 は攪乱で出土した。甕の底部で上げ底を呈し、外面には一部黒斑がみられる。105 は排土で見つかった壺の胴部である。外面には沈線とヘラ描き羽状文が施され、内面にはユビナデ調整がみられる。

Ⅳ．おわりに

今回の調査では遺構の密度は低いものの、弥生時代前期末～中期初頭、古墳時代初頭、古代、中世前半、近世と各時期の遺構や遺物が検出された。検出された遺構の中では溝が最も古く、東西方向の SD022 が弥生時代前期末～中期初頭以前の時期と推定される。南北方向の SD012 と SD033､SD033 と同一遺構の可能性がある SX011 が弥生時代前期末～中期初頭、SK005 が弥生時代中期初頭と考えられる。SD012 と SD033 は深さに違いはあるものの、並行して延びている。本調査地では弥生時代前期末～中期初頭の遺構が最も多い。調査区北西の包含層においても弥生時代前期末～中期初頭の土器片が多く検出されており、同時期の遺構や遺物は調査区の西半に広がる状況である。

SD018 は古墳時代初頭とみられ、古墳時代の遺構はそれ以外検出されていない。SK007 が 8 世紀後半、SE002 が 11 世紀代、SE010 と SK062 が 12 世紀中頃～後半、SE063 が 13 世紀中頃～ 14 世紀初頭と推定され、古代～中世の遺構に関しては主に調査区の北半に位置していた。近世に関しては、調査区南東端で SK001、調査区西端中央で近世末～近代と推定される SE008 が検出されたが、遺構数や遺物量は少ない。

遺物はパンケース約 16 箱分出土し、弥生時代前期末～中期初頭と古代末～中世前半の時期のものが大半を占める。遺構数や遺物量から、本調査地では弥生時代前期末～中期初頭と古代末～中世前半に画期があると考えられる。弥生時代前期末～中期初頭については、大橋E遺跡の東側に位置する第１・２次で同時期の遺物が多く出土しており、今回の調査によって遺跡の南西側においても同時期に遺構や遺物が拡がっている状況が確認できた。古代末～中世前半については、第３･12 次調査で中世前期頃の方形区画をなす溝が検出され、屋敷地があった可能性が示唆されている。第３･12 次調査区は本調査区の北西側に位置しており、調査区の北半に古代末～中世前半の遺構がまとまっていることから、屋敷地に関連する遺構である可能性が高い。

（1）Ⅰ区全景（北から）

（2）Ⅱ区全景（北から）

PL.2

（1）SE002 半裁（西から）

（2）SE063 上面組石（東から）

（3）SE063 井筒半裁（西から）

（1）SK001（東から）

（2）SK005（東から）

（3）SK062（南東から）

PL.4

5

11

21

45

46

65

52

59

76

99

出土遺物（縮尺不同）

報 告 書 抄 録

ふりがな	おおはしEいせき8
書名	大橋E遺跡8
副書名	― 大橋E遺跡第13次調査の報告 ―
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1359集
編著者名	松﨑友理
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8620　福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号　TEL 092-711-4667
発行年月日	2019年 3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
おおはしEいせき 大橋E遺跡 第13次	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 みなみくみやけ 南区二宅 1ちょうめ17ばん2，ほか16ぴつ 1丁目717番2，外16筆	40134	2382	33° 33′ 11″	130° 25′ 33″	20170105 ～ 20170303	487	記録保存 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大橋E遺跡 第13次	集落	弥生時代 古代 中世 近世	溝・井戸 土坑	弥生土器、土師器、白磁、青磁、陶器、瓦、砥石、鉄滓	

要約

第13次調査で検出された遺構は溝5条、井戸4基、土坑4基、ピットである。遺物はパンケース約16箱分出土し、弥生時代前期末～中期初頭と古代末～中世前半の時期のものが大半を占める。遺構数や遺物量から、調査地内では弥生時代前期末～中期初頭と古代末～中世前半に画期があると考えられる。弥生時代前期末～中期初頭については、遺跡内での検出例が少なく、今回の調査によって遺跡の南西側においても同時期の遺構や遺物が拡がっている状況が確認された。古代末～中世前半については、遺構が調査区の北半にまとまっている状況が確認でき、本調査地の北西側で想定された中世前期頃の屋敷地に関連する遺構である可能性が考えられる。

大橋E遺跡8

―大橋E遺跡第13次調査の報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1359集

2019年3月25日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8－1

印刷　有限会社　宏栄社印刷
福岡市南区清水1丁目10－5

大橋E遺跡8

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第一三五九集

二〇一九　福岡市教育委員会